

# グリーンニュース 第35号

発行年月日 平成 20年 3月 24日  
発行責任者 群馬県環境アドバイザー連絡協議会  
代表 鈴木 克彬

環境アドバイザー重点行動テーマ

## 行動する環境アドバイザー

・・・研修・情報交換の場を広く・・・



(早春の花 カタクリ)

環境政策課からのお知らせ (2ページ)

生命の根幹 水・水・水 ~ペルー・インカをたずねて~ (3ページ)

【専門部会】

ごみ減量活動事例報告会・討論会・運輸部門にも目を向けよう (4ページ)

タンポポの花を観察してみよう・EMで学校のビオトープの水を綺麗に (5ページ)

【地域活動】

森林と農業に関心をよせて・地球環境問題 (6ページ)

生き生き体験教室“やっばお米だね”・化学物質の環境リスク (7ページ)

広報ア・ラ・カルト (8ページ)

～ “環境” 関連 気になる情報 ご紹介 ～

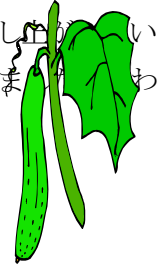
冊子の紹介 「1冊まるごとニガウリBOOK」

身近にできる温暖化対策として、ご家庭でグリーンカーテン（つる性植物を、窓際や壁沿いに育てて日陰をつくること）に取り組んでいる方も多いと思います。日本でおなじみの夏のつる性植物と言えばアサガオやフウセンカズラでしょうが、葉の茂りがよく比較的育てやすいことや実が食べられて一石二鳥とのことでニガウリ（ゴーヤ）を使う方も増えています。ところで、本県の館林邑楽地域はニガウリの生産が盛んな地域でもあります。また、地域の食文化に根付いた食材になっていない面もあるようです。そこで、このたび県館林行政事務所では、地域産のニガウリをより多くの方に知っていただき、たくさん召し上がっていただくため「1冊まるごとニガウリBOOK」を作製し希望される方にお配りすることになりました。ぜひ食べてください。

魅力的なレシピが満載です。栽培方法、農産物直売所の情報なども紹介されています。

今夏、地場産野菜として、またグリーンカーテンの副産物としてのニガウリをおいしく食べながら、地産地消&温暖化防止に役立てるといのはいかがでしょうか。

◇配布場所◇ 県館林行政事務所、管内各市町役場、館林邑楽地区の農産物直売所等  
※郵送を希望される場合は、140円分の切手を貼った角形2号（A4版が入る大きさ）



講演会紹介 桐生自然観察の森開園20年記念講演会

「サクラソウとトラマルハナバチと桐生自然観察の森」

サクラソウを知っていますか？ 新里町のサクラソウは、県の天然記念物に指定されている貴重な植物です。観察の森開園20年を記念し、「サクラソウとトラマルハナバチ」の著者であり桐生市周辺にしかないサクラソウの仲間のカッコソウの研究者でもある講師を招き講演会があります。

講師：鷲谷いづみさん（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

1950年東京生まれ。東京大学理学部卒業。東京大学大学院理学系研究科修了（理学博士）。専門は生態学、保全生態学。生物多様性農業と自然再生等の幅広いテーマの研究にも取り組んでいる。桐生の鳴神山周辺に生育するカッコソウ研究にも携わり成果を挙げている。主な著書「保全生態学入門—遺伝子から景観まで」「生態系を蘇らせる」「タネはどこからきたか」「サクラソウの目」「コウノトリの贈り物」。桐生市等で使用している国語教科書小学5年（上）「サクラソウとトラマルハナバチ」の著者でもある

日時：H20年4月13日（日）13:30～15:30

会場：桐生市中央公民館市民ホール（桐生高校前。桐生市稲荷町1-4）

主催：桐生市

後援：桐生市教育委員会、上毛新聞社、桐生タイムス社、FM桐生、桐生自然観察の森友の会

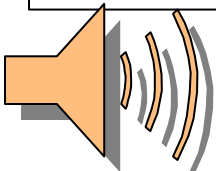
参加対象：小学校高学年以上 500名 参加費： 無料

申し込み： 電話、電子メール、FAX等で、下記まで。

「桐生自然観察の森」〒376-0041 桐生市川内町2丁目902-1

TEL・FAX：0277(65)6901 《火曜はお休みです》

Eメール：[shizen@city.kiryu.gunma.jp](mailto:shizen@city.kiryu.gunma.jp)



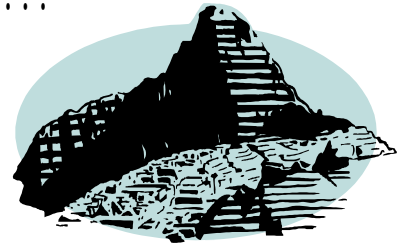
## 全国都市緑化フェアはじまるよ～

“花と緑のシンフォニーぐんま2008”が、いよいよ3月29日から、県内各会場で始まります。美しい花はもちろん、屋上・壁面緑化などの緑化技術の展示もあります。散歩がてらにお出かけください。6月8日まで。



# 生命の根幹 水・水・水

…ペルー、インカをたずねて…



## 夢のマチュピチュと高山病

長年の懸案であったインカ帝国のマチュピチュ遺跡に、家内と二人で行って来ました。テレビやパンフレットでは何回も見ていた世界遺産ですが、目の前で雄大な遺跡を見るのは勿論初めて、“これがマチュピチュか”と感動し、脳裏に焼き付けて来ました。

その他、標高3,400mのインカ帝国の首都クスコ、小型プロペラ機に搭乗し上空から見たナスカの地上絵、琵琶湖の12倍の広さを持ちながら富士山より高い3,890mにあるチチカカ湖等を見て廻ったのですが、高山病にやられてしまい、食欲もなくなり“本当に疲れた”という貴重な体験をしました。

## つづく砂漠 川は70kmに一本

さて、今回ペルーという国を訪問し、水がいかに大切かを改めて感じさせられました。皆様もご存知のようにペルーは南米太平洋側3,000kmの細長い国です。私達はナスカに行くためリマからバスで約300km南下したのですが、その間殆んどが砂漠です。しかし途中とところどころに緑と集落があります。そして分かったことは、そこには必ずアンデス山脈から流れてくる川(水)があることでした。

「ペルーで太平洋側に流れ出す川は全部で何本あるのですか」という私の問いに、現地のガイドさんは「43本です」と答えました。3,000kmで43本です。単純計算をすると平均70kmに川一本であり、日本に置き換えると東京・本庄間で緑の集落は一つだけ、他は砂漠地帯ということです。改めて生命の根源は水だ、と感じました。

## 水の確保が生命をつなぐ

一方、2,400mの山の頂に造られたマチュピチュの遺跡でもきちんと水路が出来ており、絶えることなく水が流れていました。カミソリの刃も通さないといわれる石積みは大変有名ですが、水を中心とした高度な土木技術があってこそ、このマチュピチュが存在するのだと思いました。

昨今、地球の砂漠化が叫ばれています。アメリカの西海岸サンディエゴ近辺でも、都市用水と農業用水との権利争い、北京近辺での水不足等、世界を見れば水飢饉はきりがありません。それに比べ群馬は水が豊富で高原野菜の宝庫といわれています。しかし、改めて考えてみると、それは地域の先輩方のご努力によって可能になったものだと思います。古くは群馬でも長野堰、天狗岩用水、近年では群馬用水、大正用水等の例を見ても分かることだと思います。

(連絡協議会代表 鈴木克彬)

## 「ごみ減量活動事例報告会・討論会」

ごみ部会では、県内各地域でごみ減量に積極的と組んでいる自治体組織、ボランティア団体による「ごみ減量活動事例報告会・討論会」を企画している。

第1回を東毛・西毛地区を対象に3月30日(日)13時～16時15分に昭和庁舎で、第2回を中央・北毛地区を対象に5月～6月(日時・会場未定)に開催する。

これは、各地域で個々に取組んでいる団体の活動事例を発表し、討論することによって、発表団体及び参加者の交流と相互の活動の内容や進め方、成功事例、失敗事例、悩みを共有し、ごみ減量活動の活性化を図ろうとするものである。

環境省は一人が一日に排出する家庭ごみの量を2015年度までに、2000年度比20%減の約530gとする目標を決めた。2000年度の660gから2005年度で605gと5年間で8%削減してきたが、今回の目標を達成するためには、さらに75g、11%削減する必要がある。この目標は3月中に閣議決定する「第二次循環型社会形成推進基本計画」に盛り込まれ、強制力はないが地方自治体の対策の目安として、ごみの減量を図ることになる。

家庭から排出される温室効果ガスの中で、ごみの比率は5%程度であるが、減量に取り組むことは大量消費、大量廃棄型の生活スタイルを見直し、家庭での温室効果ガス全体の削減取組みへのきっかけとなることが期待出来、その意義は大きいといえる。

環境アドバイザー、地域のボランティア団体、自治組織も、自分たちが居住する地方自治体のごみの減量化の取組みに積極的に協力して、目標以上の減量を実現していきたいものである。そのためにも、今回の「ごみ減量活動事例報告会・討論会」を有意義なものにしたい。

(ごみ部会 吉澤 敏則)

## 運輸部門にも目を向けよう

### ～温暖化防止対策～

話題になった道路特定財源について、残念ながら車社会を見直そうという議論までにはならなかったが、部会では県交通政策課の新井祥純氏を講師に「温暖化防止対策における公共交通の役割」というテーマで勉強会をおこなった。

全国の乗用車と飛行機利用の1割を鉄道にすれば、CO<sub>2</sub>を1%削減できる、という新聞記事を見て、自動車王国の群馬でも何らかの行動をと思っています。

交通機関が不便だから自動車を利用せざるをえない、という声がある一方、もともと群馬はバスや自転車王国であったという新井氏の説明(バス利用者は、ピーク時に比べ9割以上減少) 公共施設や住宅団地、大型スーパーを駅から遠くに造り、結果的に自動車利用に頼らざるをえない街づくりもあって、バス路線を減少させてしまった。そして今、かろうじて残っている中小鉄道やバスさえも存続を危ぶんでいる。先人が苦勞してつくりあげた公共交通をここで無くしたら、二度と復活できないと新井氏は力説する。

同じく運輸部門のCO<sub>2</sub>増加が著しい長野県では、温暖化対策として自治体や民間企業に呼びかけ、マイカー通勤節減運動を実施しています。これは通勤を自動車から公共交通や自転車などに切り替えてもらうもので、呼びかけに応じた78団体が協力し。企業の中には環境推進手当を支給したり、マイカー原則禁止を始めたところもあります。群馬では、一部でノーマイカーやパーク&ライドなど見られますが、大きな動きになっていません。ぜひ長野のような取り組みができないか考えてみませんか。

(温暖化・エネルギー部会 小川 仁司)

# タンポポの花を観察してみよう

(在来種と帰化種)

今の時期空地にタンポポが咲いています。見つけたら近寄ってよく見て下さい。花の根元が少し膨らんでいて総苞片(いわゆるガクの部分)が上向きにぴったりくっついたままであれば、それは日本固有(在来種)のタンポポです。群馬県あたりであれば「カントウタンポポ」でしょう。一方、このガクの部分が「イナバウアー状態」で下に垂れ下がっているのが帰化植物である「セイヨウタンポポ」でヨーロッパ原産です。おそらくこちらが圧倒的に多いと思います。熟した実の色が異なる「アカミタンポポ」もやはり帰化種でガクは垂れ下がっていますが実の色以外区別はつきません。また在来種では花がヒマワリのように完全に開ききらない事や葉の形にも特徴がありますが、まずはこのガクの違いを覚えてください。在来種にはこの他トウカイタンポポやカンサイタンポポなど20種程度があるそうですが、専門家以外では区別がつかないでしょう。それからたまに見つかる白花の「シロバナタンポポ」も在来種でやはりガクは垂れ下がっていません。

在来種のタンポポが何故セイヨウタンポポに負けたのか？単純な生存競争の結果ではなく、「環境対応力」の差と考えられます。在来種は年に一度しか開花しない上に他の花から受粉しないと実をつけないので群落として生存できる環境が必要です。これに対し帰化種は年に数回花をつける上に単為生殖で繁殖しますから新しい環境にどんどん対応して繁殖できます。昔からあった空地や田畑のあぜ道などが開発されてなくなっていく過程で在来種が減り、結果的に目に付くのがほとんどセイヨウタンポポになってしまったのが現状でしょう。

できれば子供達と一緒にタンポポを観察して下さい。身近な自然に目を向ける第一歩として。

(自然環境部会 田中 和夫)

## EMで学校のビオトープの水を綺麗に

2月12日の寒い日、新里中央小学校を訪ねました。ここでは4年生の総合学習で環境問題を取り上げています。6月、導入にエコムブ号を頼み勉強した後で、児童の興味に添って、9つのグループに分かれて学習した中の一つ、ビオトープを綺麗にしようという目的で始めたグループを取材しました。このビオトープも水が汚れて居る所に住むザリガニが沢山いるそうです。又夏は蚊が凄く近寄り難い所に成って居るという事です。方法はEMのとき汁活性液を入れてみる事にしました。調査方法はほぼ閉鎖されている池の隅にEM発酵液を入れて、そこと離れた場所の2カ所の水を測定。EM発酵液は約1リットルを1週間に1回入れてみた。入れる所は池の西側で、西と東の2カ所を測定したそうです。閉鎖されたと言っても、東にいくらか流れているビオトープなのでEMを入れた西より東の方が綺麗になったようです。昨年の猛暑の夏休みEMを入れに子供達が学校に通った事を聞いて、綺麗になる事を信じて、通ってくれた子供達にご苦労様と言いたいです。この経験を心の隅に環境を考えられる大人になって欲しいと思いながら、教頭先生にも是非子ども達と綺麗なビオトープを継続して欲しいとお願いして学校を後にしました。



「上が東、下が西(EMを投入)最初は盛り上がる程のノロが分かる」



「現在のビオトープ」

(広報部会 金井 拓美)



## 森林と農業に関心をよせて

低廉な外材におされ森林の木材供給需要が大きく低下するに伴い、森林を保全しながら木材を供給していくくみが著しく欠落していった。また、生活文化である里山から生まれ自然との間に極めて密接な一体感を造りだしていた森林文化は忘れ去られ、森林と生活文化は分離していった。これに伴い、森林の保全が停滞し、首都圏にきれいな水を供給し、水源涵養機能をもつ森林の役割が低下している。さすがに、飛鳥時代の藤原京・平城京における皆伐や戦中戦後の大伐採の結果もたらされた洪水・土砂崩れなどの大災害に至ることはないようだが、森林の多目的機能を上下流の中で活用して行こうと言われ続けて久しい。

さて、中国からの食材の問題が大きくクローズアップされている。この背景には日本の消費者や事業者が虫食いのないきれいな野菜を要求することから、農薬の使用が過剰に増えていることが否めない。日本の食料自給率は低下し続け、その改善が求められる一方、未耕作地は増え、コンビニやスーパーで毎日捨てられる食料も膨大な量となっている。

日本の農林業政策の転換が望まれるが、そのためにも私たち一人一人の意識改革が重要である。我々世代はその方向づけをしっかりと行い、少しずつ実践しながらも、次世代を担うこどもたちに託していくことの視点が必要であろう。100年先を見据えた人材づくりから、今後の教育に課せられる意義は大きく、長い時間をかけて取り組まなければならない課題ではあるが、早急に着手していかなければならない課題でもあると思うのだが……………？

(環境アドバイザー・大泉地区 久保田 伯一)



## 地球環境問題

できる事からはじめてみましょうー

私たちの会では、生ゴミの資源化運動に取り組み生ゴミの減量化・資源化・堆肥化に取り組んできました。ゴミは宝だという会員の全体意識と共通理解から平成12年に善玉菌を増やす会が始まりました。EM菌とは善玉菌群のことです。この善玉菌を活用してEMボカシづくりやEM活性液や米のとぎ汁EM発酵液づくりなどを基礎にして環境・食の分野に活動目標を決め現在も取り組んでいます。

平成19年4月には約50名余の会員が集いEMボカシ作りに取り組み6月には東京でEMエコアドバイザー・EMエコインストラクター資格取得講習会に参加。本会より3名の有資格者が誕生した。7月の北関東EMネット3県では本会から基礎講座に10名受講した。8月の本会主催、野菜・果樹の収穫交流会では大変好評であった。地域環境学習、安中高別当公民館、水の汚れを浄化する研修会では秋間小元教諭を講師にEM活性化液・米のとぎ汁EM発酵液EM泥団子を作り川に投入体験、水の技術を基礎講座に続き再度習得。9月のEM先進地視察1泊2日研修旅行には①国立公園周辺の豚舎でのEM活用②大町市内の稲作でのEM活用、観光としてEMぶどう園の見学会に参加。食の安心・安全、国内の食糧自給率の低下、団塊世代の大量退職後に家庭菜園実施者や希望者の増加。9・10・11月自然農園菜園アドバイザー受験資格講習会・1月国家試験へ会より3名受講・受験。平成20年2月北関東EMネット理事会(前橋)参加。3月東京にEMエコアドバイザー資格取得講習会に本会より2名参加予定。3月9日北関東EMネット総会・交流会・講演予定、駒沢大学杉田教授(会場前橋)今後も地球を癒すEM技術をしっかりと習得し、会員個々の夢が実現できるよう願っています。

(善玉菌を増やす会 青木 純郎)

## 生き生き体験教室“やっば・お米だね”

“やっば・お米だね”のタイトルで子供たちとお米作りを始めて、今年度で5回目が終了しました。今回は田植えを、昨年7月8日に行い、8月の猛暑の中での観察会、秋には稲刈り・脱穀としめ縄作りを体験し、最後はお待ちかねのお餅をつき、キンピラおこわと色々な豆が入ったおこわと豚汁を作って食べました。毎回60人位の参加者がありました。



私たち「環境アドバイザー・境」が子供を対象に米作りの体験教室を始めたのは、子供達が毎日当たり前で食べているご飯がどのように出来るのか一人でも多くの子供達に知って欲しいという思いからでした。実際に田植えをして苗が育つを見て、粳が出来て米になるまでを体験する事によって、ご飯が農家の人や多くの人たちに支えられていることを、少しでもわかって欲しいのです。

そしてこの田んぼは除草剤や殺虫剤を使っていないため、観察会の時多くの虫を見ることが出来ます。しかし害虫ばかりではなくその殆どはただの虫です。それらは稲としっかり共生し田んぼの生命の豊かさを示しているのです。虫やカエルを見つけた時の子供達は目を輝かせていました。そんな目の輝きを見たくてこれからもこの体験教室を続けて行きたいと思うのです。

(環境アドバイザー・境 関口 惣一)

## 化学物質の『環境リスク』

中国製冷凍餃子から猛毒のメタミドホスが検出され、これを食した人が健康被害にあい大騒動となっています。どのような経路で混入されたのかは現時点(2月7日)で判明していませんが、この化学物質は有機燐系農薬として中国では使用されています。日本ではメタミドホスは製造、使用を禁止していますが、これよりも毒性の弱い有機燐化合物は農薬として使用されており、また防蟻剤、防火カーテンの難燃剤、床ワックスの平坦化剤などにも使用されています。有機燐系農薬を稲作等において空中散布することにより、周囲の住民が汚染され、これが原因で神経・精神障害を起こして問題となっており、農薬以外にも有機燐化合物に起因する健康障害が生じています。

今話題の有機燐化合物を例にしましたが、化学物質は私たちの生活を豊かにし、多くの利便性をもたらしていますが、間違った使い方をすると、人や動植物に悪影響を及ぼす恐れがあります。

化学物質が人や動植物に悪影響を及ぼす性質を『有害性』と呼ぶのに対し、環境中に排出された化学物質が悪影響を及ぼす可能性のことを化学物質の『環境リスク』と呼び、これは有害性の程度と体に取り込む量によって決まります。

過去に化学物質が原因でイタイタイ病、水俣病、カネミ油症事件等の公害を経験し、今地球温暖化(炭酸ガス、メタン)オゾン層破壊(フロン)酸性雨(窒素酸化物、硫黄酸化物)等の地球環境問題やダイオキシン、環境ホルモン更にシックハウス症候群なども化学物質が原因です。

私たちは化学物質の正しい知識を身につけ、正しい取り扱いにより事故を防ぐために環境学習会を安中市、高崎市で実施してきました。関心のある方は一緒に勉強をしませんか。

(環境アドバイザー・安中 山口 牧夫)

## ◎カタクリのこと(表紙写真関連):

①カタクリは里山周辺の落葉広葉樹林などの開けた場所に群落・自生していますが、紫がかったピンクの可憐な花は種から花が咲くまで4~8年かかる貴重な野草のため、県内の群生地(妙義、赤城山麓、吉井町小串・笠懸岩宿のカタクリの里など)は殆ど保護の対象となり採取は無論、踏み込みも禁止されています。

②カタクリ粉(片栗粉)は明治の頃まではカタクリの根から作られていたようですが、今はジャガイモからで、カタクリからのカタクリ粉は一般には販売されていません。原料がジャガイモでも片栗粉として偽装表示扱いはされない程、公知の事実と化しています。

同じ様に「くず湯・くず餅」や「わらび餅」も葛や蕨の根を原料とせず、ジャガイモやサツマイモの澱粉であっても「くず」や「わらび」の表示 OK の様です。

◎**添加物の話**「コーヒーフレッシュ」:皆さん、コーヒーフレッシュは何で出来ているか知っていますか? サラダ油に水を入れても混ざりませんが、「乳化剤(界面活性剤)」を入れてかき混ぜるとあっという間に水と油が混じって、ミルクらしく白く乳化します。しかしこれではミルクらしいとろみがない。そこで「増粘多糖類」でとろりとさせて、仕上げに「カラメル色素」で、ごく薄く茶色に色を付けて、ハイ出来上がり。乳牛から絞ったミルクではありません。(「食品の裏側」安部 司 著より K)

◎**水の大切さ**:鈴木さんから「水の大切さ・・・」の寄稿をいただきましたが、文明の発祥地すべて大河の流域です。昨年訪れたエジプトはナイル川辺のみが青々としており、他は全くの大砂漠、雨は2ヶ月に1度とか、水の大切さを実感しました。(S)

◎**会報の原稿**:地域での環境への取り組みを各地区での活動グループ代表から紹介記事を戴き伝えてきましたが、本号で一巡しました。そこで、今後は当連絡協議会の幹事(とりわけ地域ブロック世話役の書記)の方々(毎号3~5名)に環境に関わる活動や想いを執筆していただくことにします。その節はよろしく対応・ご協力願います。また会員からの積極的な寄稿も歓迎します。併せてホームページへの投稿・ご意見をお寄せください。

今後の行事予定並びに行事報告はインターネット・ホームページ  
「ぐんま環境アドバイザーネット」

<http://gadviser.hp.infoseek.co.jp> に適時、掲載されています。

行事予定・報告等の掲載を要望される方は下記の E-MAIL アドレスに連絡ください。

[gadviser@infoseek.jp](mailto:gadviser@infoseek.jp)

「グリーンニュース」のバックナンバーもホームページでご覧になれます。